

# トルコ、重層した歴史の大地を走る

新免 光比呂 民博 民族文化研究部



長距離バスに乗ってみました

長距離バスと人びと

東西 1600 キロメートルにおよぶ広大な大地をもつトルコ。かつての帝国の地を偲ぶ筆者を待ち受けていたのは、思いのほか快適な長距離バスの旅だった。

もう一〇年以上前のことになる。長年の夢だったカッパドキアの奇岩とキリスト教徒の地下都市を訪れた。時は新年を迎えようとしており、イスタンブルの空港は人びとでこったがえしていた。それでもなんとか飛行機にたどり着き、一時間のフライトで無事にカッパドキアの空港に降り立った。

## 歴史の宝庫

カッパドキアには、柔らかい地層と硬い地層が重なり侵食した結果、キノコのような形をした不思議な巨岩が乱立している。また隠れ家として岩を削って内部に住んだ初期キリスト教徒にならった独自の住居がある。



カッパドキアを走る長距離バス

カッパドキアの訪問が慌ただしく終わると、遠く離れたイスタンブルまで戻らねばならない。だが飛行機で帰るのはもったいない。トルコの大地には、コンヤ、イズミル、チャナッカレ、エディルネなど、歴史的な都市がたくさんある。では長距離バスに乗ろう。トルコを半周する旅の始まりである。

## いざ、乗車

トルコで長距離バスというのは、至極便利で簡単な乗り物である。たくさんの町がバス路線で結ばれており、その町のはずれにバスターミナルがある。チケットをターミナルで購入し、バスを待つ。時間どおりにバスがやってくる。さて、どの席にしようかと物色するが、どの乗客もチケットを見ながら席を探している。「えっ、席が指定されているの?」。それまで地中海沿岸、バルカン地域で長距離バスに乗ったことはなかあるが、指定席を守っている人はあまり見たことがなかった。見晴らしの良い前の座

席に座りたかったが、しかたがない、真ん中あたりの席に座る羽目になる。そして、驚いたことがもうひとつ。バスの運転手以外に若者がバスを出たり入ったりしていた。バスが走り出すと、彼はレモン・コロンとお菓子をもって乗客のあいだを回るので。そしてチャイ。なんと気が利いているのだろう。長いバス旅もなんだか楽しくなってきた。

## イスタンブールへの道草

最初の停留地コンヤはトルコ内陸アナトリア地方の主要都市のひとつで、パウロがキリスト教の布教に訪れた。現在では、イスラーム神秘主義者ルーミー（メヴラーナ）で知られる。二七三年に亡くなるまでコンヤで活動し、トルコを代表する神秘主義教団メヴレヴィー教団を開いた。ルーミーの墓廟はオスマン帝国期には教団道場として使われていたが、一九二七年、世俗主義を主張するケマル・アタテュルク政権によって神秘主義教団は解散させられ、廟も閉鎖された。現在はメヴラーナ博物館として一般公開されている。



コンヤのルーミー廟



トルコ、イスタンブール

次の停留地イズミルは、エーゲ海に面する都市で、古くはスミルナとよばれた。イスタンブールに次いでトルコ第二の規模の港湾都市で、近くにはエフェソス、ベルガマ（ベルガモン）などの古代遺跡もある。考えてみると、これらはみなギリシャの遺跡である。その遺跡を我が物としているのも、遊牧の民の末裔ならではないかという気がする。



エフェソス遺跡

三番目の停留地チャナッカレは国土の北西に位置する。アジア・ヨーロッパにまたがり、ダーダネルス海峡を挟んだ海峡交通の要所である。トロイの木馬で有名なトロイ遺跡観光の拠点である。観光客も多いが、なんとなくヨーロッパを感じさせる港町である。最後の停留地エディルネは、トルコの最西端に位置し、ヨーロッパ側の東トラキア地方の国境地帯に横たわる。市街中心部からギリシャ国境まで五キロメートル、ブルガリア国境まで一〇キロメートルの国境の町である。ちょっとギリシャ、ブルガリアを覗いてみたかったが、タクシー代が高く泣く泣く諦めた。イスタンブールからの長距離バスなら楽に越境できるのだが。

## 帝国の周辺と中心

筆者のフィールドであるルーミアから見るとイスタンブールは、はるかかなたに位置していると感じられる。だが、イスタンブールから見るとルーミアはすぐそこである。この眼差しの落差というのは、帝国（オスマン）というものの本質に根差しているのだろうか。中心から見ると、すべて帝国の内部に秩序づけられている。しかし、辺境の当事者は帝国を意識することとはなく、たんなる異形の支配者としてしか考えない。重層した歴史に向き合うと、人はにわか思想家になりがちである。長距離バスで走り抜けたトルコの大地は、あまりにも広く深く歴史に根差しており、乗り物酔いならぬ歴史酔いに襲われてしまった。